

〈学習院大学史学会第十九回大会記念講演〉

## 政治史上の宇多天皇

—

「政治史上の宇多天皇」というと、平安時代をやっておられる方は、どこかで聞いた題だと思われるかも知れません。実は、以前聖心女子大学におられた目崎徳衛さんに「政治史上の嵯峨上皇」という論文がありまして、それを拝借したわけでありました。目崎さんには、本日主題と直接関わる「宇多上皇の院と国政」という論文もあります。目崎さんは俳句の師匠でもあり、詩人としての感性と歴史の本質を見抜く鋭い目とをお持ちで、私はかねがね尊敬しております。そういうことで、目崎さんの論文の題を拝借した次第であります。

先ほどの牧さんの紹介にもありましたように、私は学習院大学では専任として十年、教壇に立ちました。その間、学部で『日本紀略』と『類聚三代格』とを隔年にテキストとするやり方をしておりました。『日本紀略』は六国史が終わったあとということと、宇多天皇の即位の年、仁和三年（八八七）から始めて、本年一

月、延喜十八年（九一八）で終わりました。すでに醍醐天皇の時代になっていますが、宇多上皇は健在で、醍醐天皇が亡くなったあとの承平元年（九三一）まで在世していました。ですから演習の期間中、ずっと宇多天皇とおつきあい、と言っては失礼ですが、向かいあっていたわけでもあります。

演習のテキストということになると、学生さんの方はレポーターがそのつど調べてくればよろしいのですが、教師の方はそうはいきません。学生さんがどの程度調べてくるか判らないので、まんべんなく調べておく必要がある。『日本紀略』は記事が簡単ですから、『日本紀略』のことを調べるためには『大日本史料』を見なければならぬ。それで随分宇多天皇のことについて勉強し、その活動に関心を持つようになった。そういうことで、大学を退いた年の史学会の大会に講演をせよと言われたとき、これを題目に選ぶのがふさふさいと思っただ次第です。

笹山晴生

## 二

宇多天皇は、平安時代の初期、九世紀の最後の時期の天皇であります。宇多天皇の時代は古くは「寛平の治」といわれ、つぎの醍醐天皇の延喜の時代と合わせ、藤原氏による摂関政治が本格化する前の名君治世の聖代とされておりました。一九三〇年に刊行された川上多助氏の『平安朝上』（『綜合日本史大系』3）では、第七章「寛平・延喜の治」ということで、古い名分論的な考え方に囚われない、すぐれた考察が行われております。

宇多天皇の時代については、第二次世界大戦後になると、九世紀から十世紀初めにかけての社会の変動と、それに対応する政策の変化という面から考えよう、という動きが出てきました。また天皇としての在位の期間だけでなく、その後の上皇としての時代をも含めてトータルとして考えていかなければいけない、という動きも出てきております。日崎さんの「宇多上皇の院と国政」は、宇多天皇が上皇としていかに国政に関わったかという問題を扱われた論文であります。さらに最近には、保立道久さんが岩波新書で『平安王朝』という本を出されました。保立さんは平安時代史を、今までのように平安初期の時代、摂関時代、院政時代というふうに輪切りにするのでなく、王の年代記というか、「持続する王権」という視角から新しく捉え直そうと試みられていて、大変示唆の多い本になっております。

宇多天皇につきましては、その他詩文の世界との関わりとか、仏道修行の性格などいろいろな問題があります。経済的には、院宮王

臣家の代表とも言える経済的な基盤をもっている。そういう面をひくくするめて宇多天皇というものを改めて考えていきたい、というのが、本日の講演の主旨であります。

宇多天皇については、他の史料に引かれた形ではありませんが、『宇多天皇御記』という日記が残っており、また醍醐天皇が位についたおり、天皇に対して政治上の心構えを論じた『寛平御遺誠』というものも残っておりまして、前後の天皇に較べて、その生の姿を比較的確えやすいという点も、注目される点であります。

以下、本論に入ります。概説的なことをお話しするのは主旨に合いませんが、最初に一応宇多天皇の生涯について簡単に見ていきたいと思います。お手もとに「宇多天皇関係年表」がいておりますので、それをご覧になりながら聞いていただきたいと思います。

## 三

宇多天皇（定省親王）は仁明天皇の孫、光孝天皇の皇子で、母は班子女王、桓武天皇の皇子仲野親王の女であります。ですから直接的には、藤原氏とは系譜的な関係をもっておりません。

当時の皇位の継承は藤原北家、藤原冬嗣の系統と密接に関わっております。嵯峨天皇の子の仁明天皇に冬嗣の女の順子が嫁ぎ、その間に生まれた文徳天皇に良房の女明子が嫁ぎ、その間に生まれた清和天皇に長良の女の高子が嫁ぎ、そしてその間に生まれた陽成天皇に皇位が伝わる。そうした状況の中では、光孝天皇や宇多天皇が皇位につく可能性は本来ほとんどありませんでした。ところが陽成天皇のとき、時の摂政の藤原基経と天皇との間に事件が生じ、基経



## 《宇多天皇関係年表》

| 西暦  | 年号   | 歴代 | 事 項  |
|-----|------|----|--|
| 867 | 貞観 9 | 清和 | 5.5 誕生   |
| 872 | 14   |    | 9.2 藤原良房没 (69 歳)   |
| 876 | 18   | 陽成 | 11.29 清和天皇 (27 歳)、皇位を貞明親王に譲る   |
| 877 | 元慶元  |    | 正.3 陽成天皇即位 (9 歳)   |
| 880 | 4    |    | 12.4 藤原基経、太政大臣となる  |
| 884 | 8    | 光孝 | 2.4 陽成天皇退位／2.23 光孝天皇 (時康親王。仁明天皇皇子) 即位 (55 歳)／4.13 天皇、皇子女 29 人に源姓を賜う／6.5 藤原基経に政務輔弼の勅を下す       |
| 887 | 仁和 3 | 宇多 | 8.26 光孝天皇、定省親王を皇太子に立て没／11.17 宇多天皇即位 (21 歳)／11.21 天皇、藤原基経に政務関白の詔を賜う。基経、勅答の文に「阿衡」の文字あるにより政務を見ず |
| 888 | 4    |    | 6.2 天皇、基経にあらためて関白の詔を賜う   |
| 891 | 寛平 3 |    | 正.13 藤原基経没 (56 歳)  |
| 893 | 5    |    | 敦仁親王 (醍醐天皇) 立太子  |
| 897 | 9    | 醍醐 | 7.3 宇多天皇譲位 (31 歳)。醍醐天皇即位 (13 歳)  |
| 898 | 昌泰元  |    | 10.20～閏 10.1 上皇近郊に遊猟、大和御幸  |
| 899 | 2    |    | 2.14 藤原時平左大臣、菅原道真右大臣となる／10.24 宇多上皇仁和寺に出家／11.24 東大寺に受戒  |
| 900 | 3    |    | 4.1 皇太后班子女王没／10 月 上皇、金峯山・竹生島御幸   |
| 901 | 延喜元  |    | 正.25 右大臣菅原道真、大宰府に左遷／2.13 班田励行、荘園停止などを命じる (延喜の改革)／12.13 上皇、東寺にて伝法灌頂を益信に受ける                    |
| 903 | 3    |    | 2.25 菅原道真、大宰府に没  |
| 904 | 4    |    | 3 上皇仁和寺に御室を造営、ここに移る  |
| 907 | 7    |    | 9.19 上皇大堰河御幸。天皇も行幸／10.2 上皇、紀伊・熊野御幸   |
| 909 | 9    |    | 4.4 左大臣藤原時平没   |
| 910 | 10   |    | 9 上皇、叡山にて三部大法灌頂を増命に受ける   |
| 912 | 12   |    | 2.10 紀長谷雄没   |
| 913 | 13   |    | 5.3 上皇、東寺にて齊世親王 (真寂) らに灌頂を受ける  |
| 914 | 14   |    | 4.28 三善清行、意見封事十二箇条／8.25 藤原忠平、右大臣となる  |
| 923 | 延長元  |    | 4.20 故菅原道真を右大臣に復し贈位。配流の詔書を破棄／7.24 中宮藤原穩子、寛明親王 (朱雀天皇) を生む                                     |
| 930 | 8    | 朱雀 | 6.26 清涼殿落雷、大納言藤原清真ら没。醍醐天皇不予／9.22 天皇譲位 (46 歳)／9.29 没／11.21 朱雀天皇即位                             |
| 931 | 承平元  |    | 7.19 宇多上皇没 (65 歳)  |

## 四

最初に宇多天皇の政治をめぐる問題についてお話しをしたいと思います。天皇による国政の改革は、藤原基経が亡くなった寛平三年（八九二）から、天皇が退位する寛平九年（八九七）までのきわめて短かい期間に集中的に行われました。この国政の改革には、大きくいて二つの方向があると思われます。

その一つは、院宮王臣家の活動の抑制であります。院宮王臣家とは天皇との特権的な関係にもとづく少数の皇族・貴族たちの集団で、私的な土地や財産の所有を核にしてこの時期に成長してきておりました。院宮王臣家は富裕な農民層と結びつき、土地の経営だけでなく流通や交易の面にまで進出したわけで、こういった院宮王臣家の活動を、律令で定められた収取の体制を維持するために抑制するということが、改革の一つの目標であったと考えられます。

それからもう一つは、現実在即した地方行政。当時は調庸や米などの未納・未進が累積して国家の財政を圧迫し、そうしたなかで、地方の行政にあたる国司には厳しい徴税・納入の義務が負わされておりました。それに対し宇多天皇の時代には、非常に現実的な対応が行われる。つまり累積した負債の全額を納めさせるのではなく、毎年決められた額だけを納めさせる。毎年その国の規定の納付額に、その十分の一を旧年分としてプラスして納めれば、国司の責任は果たされる。そういう政策がとられます。その背景には、宇多天皇の重要なブレインで讃岐守などの経験があり、地方の行政の実態をよく把握していた菅原道真の存在があると思われます。

こうした宇多天皇の時代の政策が、九、十世紀の政治の過程のなかでどのように位置づけられるのか、という点について申しますと、宇多天皇の時代に先立つ藤原基経の時代には、民部卿の藤原冬緒が中心となり、班田制の励行を主眼とする政策が行われました。また宇多天皇の後の醍醐天皇の時代には、藤原時平によっていわゆる延喜の改革が行われ、班田の励行、皇室領である勅旨田の新規開田の禁止などの処置がとられております。延喜の改革では、宇多天皇の時代に較べると、国司に対してより厳しい態度がとられている。それから宇多天皇の場合には院宮王臣家の活動の抑制に力が注がれておりますが、延喜の改革ではそういった路線は継承されるものの、どちらかというと皇室領の拡大の抑制に主眼が置かれている。そういった点で、延喜の改革は、藤原基経の元慶の政策を継承する面と宇多天皇の時代の政策を継承する面との両方があるわけで、元慶の改革、寛平の改革のいわば集大成である、そういうふうな位置づけられるのではないかと思います。

それではこのような改革は、何を目的として行われたのか。直接的には当時の現実の政治的課題の解決をめざしたものでありますが、その背景には、やはり国政の主導権を天皇が掌握する、ということがあったと思われます。それまで、清和天皇から陽成天皇の時代にかけて、国政の主導権は藤原北家に握られていた。清和天皇や陽成天皇はいずれも幼少の時から天皇の地位にあり、いわば自分の気がついたときには天皇になっていた。そういう時期を脱却し、天皇みずから政治の実権を取り戻すためには、具体的な政策の面で主導権を握ることが大切であって、それを宇多天皇は行った、そういう

ふう位置づけられると思います。

## 五

国政の改革とともに宇多天皇の時代のこととして注目されるのは、内廷の充実であります。宮廷の制度は、九世紀初めの嵯峨天皇のときに整えられました。嵯峨天皇は、天皇としての在位後も、弟の淳和天皇、子の仁明天皇の時代にかけて上皇として宮廷の中心にありました。その嵯峨天皇のときに内廷の機構が整備されたわけであり、宇多天皇は嵯峨天皇の宮廷を範とし、その政策を踏襲するたちで内廷の充実に努めたものと思われまゝ。

第一に挙げられるのは、藏人所の充実であります。藏人は天皇の秘書官的なもので、藏人所は内廷の中心となり、宮廷の経済にも関わる存在となりました。

宇多天皇は即位後間もなく、寛平二年（八九〇）の十一月に勅を下して藏人の職務の重要なことを説き、その心構えを論じております。これは藏人についての規定を集めた『侍中群要』に出てくるもので、天皇は即位の当初から藏人の重要性を認め、その充実を図っていたこととなります。そして翌年正月十三日に藤原基経が没すると、二月十九日には天皇はそれまで住んでいた雅院から内裏の清涼殿に入り、三月三日には菅原道真が藏人頭に補され、藏人が天皇を補佐して活躍する体制が整えられることになりました。宇多天皇の時にはまた五位の藏人が置かれ、身分の高い者を藏人とする道が開けることとなります。

内廷の充実ということで次に注目されるのは、武力としての滝口

の武者の創設であります。これについては以前東洋大学の白山史学会の大会で、「滝口の武者―その武力をめぐる―」と題して講演しましたので、ここでは要点だけをお話しします。

滝口は清涼殿の北東、内裏に降った雨水が集まって外に流れ出すところ、そこに置かれた武者なので滝口の武者と称します。この滝口の武者が注目されるのは、一つには「武者」が一つの身分として現われる最初ではないかということ、第二には武器として弓矢を持つということ。それまで天皇の周囲を警固していた近衛舍人が大刀を武器としていたのに対し、滝口は飛び道具を持った狙撃兵でありました。そして第三に、その宿直の場所が天皇の日常の住まいである清涼殿に附属し、しかもそこは北の方に展開する後宮との接点に当たっていたことでもあります。こうした武力を天皇のすぐ近くに置くことは、ある意味では大変危険なことではありますが、やはり一つの意味をもつことであつたと考えられます。

宇多天皇の時にははつきり致しませんが、十世紀初めの朱雀天皇から後になると、天皇の在位中に滝口であつた者の大部分は、天皇が退位して上皇になった後はそのまま上皇に属する、いわゆる院の武者所の武者になる、という関係ができます。滝口は天皇にとって私的な、家産的な性格をもつ武力であつたわけで、それが宇多天皇の時に生まれたということには、やはり重要な意味があつたと考えられます。

内廷についてもう一つ注目されるのは、後宮の問題、ことに宇多天皇の母班子女王の存在についてであります。寛平三年（八九一）、天皇が東宮雅院から内裏に移った五ヵ月後、班子女王も内裏に入り

ます。以後、班子は後宮の正殿的な位置にある常寧殿を活躍の舞台としたようで、翌寛平四年三月には天皇がここで班子六十の算賀を行い、同年十二月には、班子女王と光孝天皇との間に生まれた忠子内親王らの皇女がここで仏経を供養し、班子女王の長寿を祈っております。

また宇多天皇の時のこととして注目されるものに、「寛平御時后宮歌合」があります。これは和歌の歴史上重要な歌合で、この歌合で詠まれた歌二〇〇首のうち、『古今和歌集』には五七首、菅原道真が編みました『新撰万葉集』には一七〇首もの歌が収められております。これは班子女王が主催した歌合で、その舞台もおそらく常寧殿であったと思われます。

宇多天皇の配偶者としては、女御として橘広相の女義子、藤原高藤の女で醍醐天皇の母となる胤子、それに藤原基経の女の温子がありました。後に藤原師輔の日記『九暦』には、一つの話が載っております。寛平五年（八九三）に敦仁親王（醍醐天皇）が元服をし、立太子をする。その夜に、光孝天皇の皇女で班子女王の生んだ為子内親王と、藤原基経の女の穂子とがともに参入しようとした。そのとき班子は宇多天皇に申し入れ、穂子の参入を停めさせた。班子はその後穂子の参入を拒み続けるのですが、藤原時平が計略をめぐらして参入させ、穂子は醍醐天皇の皇子保明親王を生む。しかしその後醍醐天皇は法皇の命を恐れ、親王の立太子を逡巡した、ということであります。班子女王が亡くなるのは醍醐天皇が即位した後昌泰三年（九〇〇）のことですが、こうしたことに、班子の勢威の強さ、後宮を抑えていたさまを窺うことができると思いま

す。

## 六

宇多天皇の、退位後の上皇としての存在と活動についてのお話に入りたいと思います。その活動の特色を三つにまとめますと、一つには、国政の権を掌握することに強い意志を持っている。第二には、仏教の修行に対して大きな意欲を持っている。そして第三には、仏道の修行の一方で、詩宴と御幸とを活発に行っている。ということになるかと思えます。またその背景に、邸宅・牧などを含む強固な経済的な基盤があることにとも注意する必要があると思います。

国政の掌握という点につきましては、宇多天皇が三十一歳の若さで皇位を醍醐天皇に譲った、その意図が問題になってまいります。これはおそらく、嵯峨上皇の例に倣い、上皇として家父長的な権威によって国政を掌握しようとするものでありましょう。藤原北家との関係の薄い醍醐天皇に早いうちに皇位を譲り、自分はその背後にあって、腹心を介して国政を遠隔操作する、これは目崎徳衛さんが言われたことでありますが、おそらくそういうことであったと思われまます。しかしその企ては、延喜元年（九〇一）の菅原道真の配流によって挫折してしまふことになりました。

道真の配流後、宇多上皇は仁和寺で仏事に専念いたしますが、その後は藤原時平の弟の忠平が上皇と醍醐天皇との関係を取りもつことに努め、延喜十年（九一〇）に時平が亡くなると、上皇と朝廷との関係は好転する。このあたりもまた、目崎さんが述べておられる通りであります。しかしそれは国政そのものに関与するということ

ではなく、家父長的な立場で皇位の継承などについて発言をする、といった性格のものであったと思われます。

次に遊獵と詩宴についてですが、宇多天皇はその在位中から、菅原道真や紀長谷雄らの文人を召してしきりに詩宴を催しておりました。退位後もとくに延喜九年（九〇九）頃からは、上皇の邸宅である左京七条の亭子院などで詩宴が催され、亭子院は当時の文芸活動の中心としての位置を占めることになりました。

遊獵・御幸の面でも、上皇は非常に活発でありました。ことに退位の翌年、出家直前の昌泰元年（八九八）十月に行われた近郊への遊獵、大和への御幸は庄巻であります。紀長谷雄と菅原道真とが詳細な記録を残していてよく判るのですが、普段は人前に姿を見せない上皇が騎馬で朱雀院を出、威儀を整えて朱雀大路をパレードする。上皇といっても三十二歳。格好いい、一目見たいということも多く、女性の車が朱雀大路に詰めかけ、大騒ぎになりました。この御幸は、大勢の官人を従えての近郊での遊獵と、少数の従者を連れた大和・吉野への御幸とに二分されるのでありますが、このような詩宴や遊獵は単なる遊興ではなく、文化的事業を主催することによって王権に対する求心力を強める役割を果たす、桓武天皇や嵯峨天皇の先蹤を継承するものであった、そういうふうに見てよろしいかと思えます。

最後に上皇と仏道修行との関わり。これには天皇と出家との関係という、奈良時代以前にまで遡る大きな問題がありますが、宇多天皇の場合について申しますと、天皇の仏道修行は決して単なる俗界からの逃避ではなく、より積極的な意図を持ったものと考えてよい

と思います。

宇多天皇は即位の前から仏道に心を寄せ、比叡山に登って出家をしようと思っていたようであります。そして退位後の昌泰二年（八九九）、仁和寺で出家し、東大寺で受戒いたしました。さらに天皇は、延喜元年（九〇一）には東寺で益信から真言宗の両部灌頂を、延喜十年（九一〇）には比叡山で座主増命から天台の三部大法の灌頂を受けました。密教の正統の受法者となった上皇は、延喜十三年（九一二）に子の齊世親王（真寂）に灌頂を行ったのを初め、他者への付法をも行うことになりました。

上皇が密教の伝法・付法を行うことはそれまでにないことで、その後仁和寺は宇多上皇の法燈を伝え、覚行が法親王の宣下を受けた後は、仁和寺の御室として代々皇族がその後を継いでまいります。王法仏法相即の象徴というか、王権と仏法とが固く結びついた姿をそこに見ることができると思います。

## 七

政治上の宇多天皇、宇多天皇の史的位置というものはどのように評価したらよろしいのでしょうか。天皇が王権のありかたについてどのような構想をもっていたのか、それがどの程度実現したのか、実際には判らないわけですが、その後の歴史を通観すると、宇多天皇の治世がその後の時代に大きな影響を及ぼし、一つの動きとして展開していくということは、確実に言えると思います。

宇多天皇が嵯峨天皇の治世を範とし、それを継承したことは間違いないありません。内廷の充実、上皇としての宮廷掌握の意図などはそ



れであります。そして同時に、宇多天皇の治世は後代の天皇・上皇の治世にも大きな影響を及ぼしている、ということでもあります。

その一つは、天皇が現実の政治の上で主体性を保持するということ。摂関家が家父長的な權威によって皇權をその支配下に置くという事態の中で、たまたま摂関家と関係の薄い天皇が即位した場合、具体的な政策の上で積極的な動きを打ち出し、それによって政治的な主体性を発揮しようとする。花山天皇や後三条天皇の場合がそれで、いわゆる「新制」という形でそれを行うことによって、そこにみずからの權威の基礎を置こうとする。宇多天皇の国政は、そうした動きの先蹤と見るができます。

また上皇としての執政という点で、それが白河上皇以降の院政に繋がることは、それぞれの執政の特質についての配慮が必要ではあるものの、やはり言えることではないかと思えます。

第二の点は、詩宴や遊獵の面で上皇が宮廷文化の指導者としての役割を担ったこと。これも王權の保持に大きな意味を持つことで、円融上皇や花山上皇のありかたに繋がってまいります。円融上皇の御遊や仏事に宇多上皇を先例とする意識が明瞭に現われていることは、目崎徳衛さんが「円融上皇と宇多源氏」の論文で指摘されているところでもあります。

王法と仏法の結合という点で、宇多上皇の存在は画期的でありました。その点、仁和寺は大きな意味を持っております。宇多野は嵯峨野に隣接し、もともと葬送の地であったと思われれますが、そこに仁和寺ができ、その仁和寺を核としていわゆる四円寺、円融天皇の円融寺、一条天皇の円教寺、後朱雀天皇の円乗寺、そして後三条天

皇の円宗寺といった歴代天皇の御願寺が置かれ、王法仏法相即を象徴するような地になってまいります。

後三条天皇の円宗寺には、大江匡房の供養願文に示されるように、盧舎那仏を本尊とする鎮護國家仏教としての性格があり、独自に考えるべき問題がありますが、これが白河天皇の法勝寺に始まる六勝寺の造立へと繋がりが、新たな展開を示してまいります。そうした動きの起点をなすのが、宇多天皇と仁和寺との関係ではなかったかと思うわけであります。

宇多天皇の経済的な基盤の問題については触れることができませんでした。通常の講義であれば、続きはまた来週、ということになるのですが、ここはそうは参りません。御清聴有難うございました。